

動物目線で福島に思い

東日本大震災から11日で5年を迎えるのを前に、東京電力福島第1原発事故を題材にした絵本の読み聞かせが9日、まんのう町四條の四条小学校（荻田裕之校長）であった。児童たちは、原発事故で故郷を失った人の悲しみや復興を願う思いなどを動物の目線で伝える朗読に聞き入り、古里や命の大切さをあらためて考えた。

震災5年
備える
香川

子どもたちが絵本の読み聞かせを通じて被災地の実情を知り、震災を忘れないきっかけにしてもらおうと同校が企画した。絵本は東京都多摩市在住の児童を除く約160人が

絵本の朗読通じ 児童ら命考える

四条小

の絵本作家・画家、夢ら丘実果さんによる「とどけ、みんなの思い 放射能とふるさと」。原発近くの家で飼われていた猫が、事故のため遠く離れた街に飼主と共に避難し、故郷に戻れない人たちが置き去りにさ

「古里の大切さや今の生活が幸せなことをあらためて感じられた。震災の被災者が



福島第1原発事故を題材にした絵本の読み聞かせを通じて、命や古里の大切さを考える児童—まんのう町四條、四条小



記者ノート

かけがえのない生命の大切さや古里への思い、家族や周囲の人々への感謝の心を育んでほしい。そんな願いがストリートに伝わってきて心が震えた。

東日本大震災から5年。宮城県の児童に励ましの絵手紙などを送ってきた四条小学校でこのほど、東京電力福島第1原発事故を題材

福島通じ生命考える

に、動物たちの目線で古里を離れることのない安や復興への切実な思いを伝える絵本の読み聞かせが行われた。

作者は東京都多摩市在住の絵本作家・画家の夢ら丘実果さん。生きることの大切さを訴える作品。教員が一言一言に気持ちを込めて読み始めると、子どもたちは真剣な表情を浮かべ、引き込まれるように耳を傾けていた。

原発に翻弄ほんろうされた住民の癒えない悲しみに胸が締め付けられたことだろう。感想を問われた児童からは「今も古里に戻れず、苦しんでいる人は多い。家族と一緒に過ごせる自分は幸せ。自分にできることを見つけて励ましてあげたい」と被災地を気遣う言葉が返ってきた。その気持ちを大切にしてほしい。(西讃支社・山崎義浩)